

井上克人先生の薫陶を受けたお弟子さんたちへのエールに替えて

宮本要太郎

令和 5 (2023) 年 2 月 5 日に突然この世を去られた井上克人先生は、数多くの優れた業績を残したことはもちろんであるが、同じく優れたお弟子さんを数多く育てられたことも否定できない。先生が研究にも教育にも等しく熱意を注いでこられたことは、20 年にわたって同僚としてお付き合いいただいた小職の目にも明らかである。このたびの井上克人先生追悼集会では、お弟子さんたち有志が研究発表を行って先生を偲んだ。

本稿は、その際用いられた発表原稿に対する短いコメントである。井上先生であればもっと核心に触れるご指摘をされるであろうが、門外漢からの的外れなコメントになるかもしれないことを予めお断りしておく¹。

◆ 山中崇史氏の論文「西田哲学における華嚴思想の一解釈—「事事無礙」と「事実の自己限定」を中心に—」に対して

・西田幾多郎が、「我々に対して与えられると考へられる非合理的なものは、すべて……「時」を通じて合理化せられる」という場合の「時」と、筆者が「私」という自覚の深まりによって、「時」が形作られるのではなかろうか」という場合の「時」とは、どういう関係にあるのだろうか？後者においてどのような形で「合理化」が働いているのか？なるべく具体的に説明してほしい。

・筆者は、西田の『無の自覚的限定』から引用した後で、「時」が「事実」として単に歴史的な出来事を指すのではなく、「時」そのものが「事実的」であるということが述べられている」と説明する。一方、同じく『無の自覚的限定』で西田は、「真に自己自身を限定する事実そのものは瞬間的今そのものの限定として、一面に我々の運命の

¹ このコメントは追悼集会当日の発表原稿に対してなされたものである。今回掲載された論文及び研究ノートは発表原稿に修正を加えたものであり、コメントとの間に齟齬が生じている場合がある。コメント執筆者からこの点に関する懸念が寄せられたが、編集委員会としては当日コメントについても掲載の価値が十分にあるものと判断し、執筆者の承諾を得て掲載した。(関西大学哲学会編集委員会)

意義を有つてゐなければならない。かういふ意味に於て事實はいつも云はゞ原始歴史 *Urgeschichte* の意味を有つて居るのである」とも言っている。また、それを受けて筆者は、「事実」が「今」であるとも言い換えている。ここで「時」と「原始歴史」と「今」の関係はどのように理解すればよいのであろうか？そこに「事実」がどのようにかかわってくるのであろうか？

・全体として「時」ということが中心に論じられているように感じたが、最後の「4. 西田哲学における「事事無礙」の一解釈」の節は、それまでの議論とうまくつながっていない気がする。「事事無礙法界」において「時」はどのように現れるのであろうか？この点についてもさらなる議論の展開を期待したい。

◆ 喜多源典氏の論文「西田哲学における「平常底」と「他者への存在」——西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」と井上克人『詩と哲学のあわい』を手がかりに——」に対して

・「制作」ということに関して、「他者との関わりでいえば、「人と人との間で互いが作り作られ変じ変ぜられること」と捉えているが、この場合の「他者」は人に限定されるのか？たとえば「自然」や絶対者は含まれないのであろうか？

・(ボンヘッファーの言う)「現代の世俗化し成人化した無宗教の時代」において、「絶対に超越的なもの」は具体的にどのような形で「表現的(象徴的または符号的)に働く」のか？言い換えれば、〈超越的或者〉からの「呼びかけ」はどこにどのような形で現れているのか？この点について、ボンヘッファー、西田、井上先生のそれぞれの視点がどのように交錯しているのか、できれば整理してほしい。

・それと関連して、本発表では、西田の「宗教論」の中の、「絶対者は何処までも自己自身を否定することによって、真に人を人たらしめるのである、真に人を救うと云ふことができるのである」とある箇所を敷衍して、「無限の慈悲」や「絶対の愛(アガペ)」が論じられるが、そもそも「救う」とはどういうことなのか？

・「宗教的關係」や「宗教的要求」や「宗教心」などについて多く語られているが、そもそもその前提となる宗教とはどのように捉えているのか？頻出する「絶対者」および「自己否定による自己の転換」こそが宗教の核心ということだろうか？

◆ 末村正代氏の論文「〈即非の論理〉の淵源と構造——井上克人〈露現と覆蔵〉

的解釈の可能性」に対して

・まず前半部分について、ヘフディング (1843-1931) からの大拙 (1878-1939) への影響の可能性を論じているが、ウィリアム・ジェイムズ (1842-1910) から受けた影響との違い、さらには同時代人である両者の心理学の違いについてももう少し説明してほしい。

・大拙の〈即非の論理〉と井上先生の〈露現と覆蔵の論〉の違いに関連して、〈時間〉の発生および情意の次元に注目しているが、井上先生も指摘されたように (鏡 3 篇 2 章)、大拙の場合「非時間」(「時間に非ず」ではなく「非-時間」) という形で論じていて、その点からすれば大きく変わらないのではないかな？

・全体を通して論旨は分かりやすいが、前半の鈴木大拙論と後半の井上克人論とで論調が異なる。その意味で、二つの論文を無理やり接続した印象を与えかねない。それはおそらく、前半部分で明示されなかった「時間」というものが後半になって突然前景化してくることに対する違和感から来るように思う。大拙が「宗教は実に超時間性をもつ」と言った時の「時間」について、たとえ大拙が綿密に考察していないとしても (なぜ考察が少ないのかの理由を含めて) 〈即非の論理〉における時間性についてある程度考察がなされてしかるべきであったと考える。

◆ 位田佳永氏の論文『『大乘起信論』と親鸞の「自然」』に対して

・親鸞において「阿弥陀仏 (ということば)」と「自然」の関係は語られているが、「信 (心)」をどう捉えればいいのか？『大乘起信論』においても『唯信鈔文意』においても、いかに衆生に「信 (の) 心」を起こすかが重要な問いであって、その点で『大乘起信論』と親鸞では、どの点で連続性があり、どの点で飛躍があるのか？仏教の「信」は (真実に)「気づく」ことが重要であると思われる。『起信論』は六波羅蜜や縁起を強調し阿弥陀仏への信心も論じているが、親鸞は (取るべき行を持たない者の) 阿弥陀仏への信に限定しているのだろうか？

・それに関連して「南無阿弥陀仏」の名号は、「南無」があつてこそ意味があるのではないかな？「阿弥陀仏」(ということば) だけでは、単なる記号に過ぎないのではないかな？

・親鸞における「自然」が「法」といかなる関係にあるのか？その点をより明確にしたいだけにとさらに理解が深まると思う。